

大学を卒業した頃のこと

中井喜和 (なかいよしかず)

大阪大学理学部教授

このたび海洋出版社が月刊“マセマティクス”を創刊されるについて雑文の寄稿を求められたとき、柄にもなくふと何か書いてみたいと思ったのは年のせいであろうか。思えば戦後、おそまきながら京都大学を卒業してから、すでに30年の歳月が過ぎ去った。数学者になろうなどという大それた野心が初めからあったわけではなく、ただ昔の人のいい草ではないが、人がものする数学の論文なるものを、自分にもかけるものかどうか、一度はためしてみたいと思ったのが、そもそもの始まりである。幸いにして卒業後2年目にもものした小論文が印刷になり、それ以来いくつかの論文を書き、人にも認められ、いつのまにか数学者の仲間にも入れてもらい、今日に至った。ここまでくるには、もとより自分一人の力ではなく、よき師、よき友に恵まれ、尻をたたかれたり、手をとって引張ってもらったりしたおかげである。思い起こせばいろいろのことがあった。それらを思いだすまま書き綴ったのがこの小文である。わたくしの拙ない体験などを書き残しても、何ほどの役に立つとも思えぬが、それでもわたくしを育てて下さった先生や先輩たち、またともに相励みし競い合った友人達のことを書き記しておくことは、まんざら無意味なことではあるまい。それはまたわたくしを育ててくれた人々への感謝の辞でもあり、儂なかりしわたくしの青春への鎮魂譜でもある。

わたくしが代数幾何学を専攻するようになったのは、もとより卒業後秋月先生のところで、指導をうけたためであるが、A. WeilのFoundations of algebraic geometryに負うところが大きい。Foundationは1945年(昭和20年)に出版され、日本に輸入されたのはいつか定かではないが、わたくしの記憶に誤りがなければ昭和22年には早くも秋月先生のところに1部あったと思う。わたくしは戦争中海軍に召集されていたので、京大にはいったのは復員後の21年の春であるが、22年頃には松阪輝久氏が(わたくしの1年上)すでに秋月先生の部屋で、タイプでFoundationを写していたと記憶する。まだ世の中は食糧難の時代で、闇市と闇物資が横行し、戦後の無秩序状態がぬげきらず、遂には餓死者さえでたという時代の背景を考えれば、このことは驚きに値することである。

秋月先生は戦前よりイデアル論を通して、代数幾何に興味をおもちであったのであるが、いち早くWeilの仕事の卓抜さと、先見性に着目されたのはさすがであると思う。その頃よりももう少し後のことであるが井草準一氏を東京文理大より京大助教授に迎えて、京大の古い体質の改善に向かって第1歩をふみだされたのも秋月先生の卓見であった。井草氏は当時すでに新進気鋭の学者として第一線で活躍しており、わたくし達に大いに良い刺激を与えてくれたものである。

さてわたくしが24年に卒業してから秋月先生にいわれたのは、まず、H. WeylのDie Idee der Riemannschen Flächeより始めよということであった。わたくしとしては同意しかねる点もあったけれど、そういう古典的素養も必要ということも理解されたので、同じ年に大学院に残ることになった西村孟君と2人でDie Ideeをよんだのであった。一方セミナーでは、井草、松阪、中野、河合氏らが代数幾何学関係の論文を紹介したり、自分のoriginalな研究を発表したりするのであるが、きいていても一向にわからない。当時井草、松阪氏はFoundationを早くも自家薬籠中のものとして、その言葉で話をするので、1日も早くこちらもFoundationをよみ終えねばならないという必要にせまられることになった。こんなことなら初めから、WeylよりWeilをよめといってくればよきそうなものと思ったが、とにかく自分1人でよみ始め、24年の夏季休暇中によみ終えたと記憶する。それ以来何とか先輩たちの話についてゆけるようになったのであった。

Foundationというのは、なかなか興味のある本で、E. Artinのうまい批評をかりると、あれは硬貨ばかりのつまっているコイン入れのような本だということである。正しくその通りで、Lemma, Proposition, Theoremがぎっしりつまっているが、金貨らしいものは見当らないようである。証明をよむと、“a章のProposition bとc章のTheorem dによってこうなって、……、e章のLemma fによって云々”とやたらに引用が多くてまことに煩雑である。いちいち本の頁をもとへ戻してめくり直すのは大変なので、Lemma, Proposition, Theoremだけをぬき書きしたノートをつくり、それを座右においてよんだものだった。何度もよく使用されるものは自然に暗記されて、何章のProposition xというだけであのことかとおかしくなるようになったものである。わたくしはとくにどうということはないが、こういうスタイルの書き方に性の合わない人も少なからずいるようで、そういう人にとってはこの本の評判はあまりよくなかった。

かつてこのFoundationを大学院のセミナーに使用したことがあった。その中にN君という人がいたが、どうもその人にとってはFoundationは全然面白くなかったらしく、セミナーでの出来は大変悪かった。しかしその後N君は、岡先生のところで多変数関数論を勉強することになり、それが性に合ったらしく、今ではその方面で立派な業績をあげている。このN君の例でもわかるし、またわたくし自身のことを振り返ってみてもはっきりいえるのであるが、感覚的に好きになれないものは、労多くして功少ないという結果におわるもののようなものである。これは学問でも、職業の撰択においても、その他諸々のことについても正しいようである。好悪の感情というのは、人為的な倫理や道徳などというものより、もっと深いところで人間の存在とかかわりあっているように思うが、どんなものであろうか。わたくしにとってはFoundationは親しみのもてる本であった。面白いという意味では、これにつづく、“Sur les courbes algébriques……”や“variété abélienne”の方がはるかに面白いのであるが、わたくしにとってのFoundationはもっと深い意味をもっていた。あれくらい熱心に繰り返してよみ、いろいろな恩恵を得た数学の本はほかにない。

昭和 25 年という年は、永田、森川両君が名古屋大学を卒業した年であり、25 年秋から 26 年にかけてその当時名大の助手であった小泉氏が湯川奨学生として阪大に来ていたのであるが、大変多くの時間を京都で過したように記憶する。27 年には西君が京大を卒業している。このように、24 年ころから 30 年ころにかけて、京都大学の数学教室には代数幾何学を専攻する人が、入れかわり立ちかわり出入りして誠に賑やかなものであった。上にすでに名前がでた人の外には、玉河、佐竹、志村、小野、谷山氏らも何度か京都を訪れたことがある。そのような雰閉気の中で、井草氏が Picard 多様体の解析的な構成に、松阪氏が同じく Picard 多様体の代数的な構成に成功し、大いに気をはいたものである。その他中野、永田、森川、西、西村の諸氏も活発な研究を行っていた。及ばずながらわたくしもある程度の成果をあげ、いくばくかの貢献をしたと自負している。

しかしこのような状況を演出されたのは何と云っても、秋月先生の功績であった。秋月先生はよくいっておられたものであるが、“俺は君達を数学という大きな流れにのせてやる。しかしその流れに乗って泳いでゆくのは君達自身の仕事だ”と、井草氏をよび、永田君を迎え、また伊藤清氏を京都の教授に迎えるなど、戦前の京大としては考えもできない革新的人事を行ない、京大の数学教室に活発な研究的雰囲気をつくりあげたのはひとえに秋月先生の英断のおかげである。もとよりいくらワンマンであるといっても、1人でそんな大事業ができるわけではなく、かげにまわって蟹谷先生などが応援しておられたにちがいないが、わたくしのような下っ端書生のうかがい知るところではない。

やはりそのころのことであつたらうが、わたくしは秋月先生にひどく叱られたことがあつた。それはたしか複素構造に関する誰かの講義録を、わたくしが紹介していたときのことであつた。わたくしの話し方が先生の意に沿わなかつたらしく、その日は小言の連続だつたと思う。あげくの果てに、“こんなセミナーでは時間のむだだ”とまでいわれたと記憶している。それまでかなりな小言の連続で、いい加減頭に来ていたところへ、この言葉、わたくしも思わずかつとして、教卓をおりるなり、“やめさせて貰います”といつてしまったものであつた。“やめる”というのはもちろんセミナーを中止するの意味であつたが、場合によっては大学を離れて、どこか高等学校の口でも探さねばならないかと真剣に考えたものである。何しろ、“それではやめる”と一言いわれたらそれでお終いだつたから。しかしその時は先生の方から手をさしのべて下さつて、事なきを得たのであるが、今から考えれば冷汗ものである。

このことがあつて暫くしてからでなかつたかと思うが、ある日曜日に、小堀先生がわたくしを尋ねて下さつたことがあつた。そのころわたくしは結婚して、小堀先生のつい近くに間借りをして住んでいたのである。上がつて頂くにも、余裕もないのでどうしようかと迷っていたら、“一寸出て来ないか”ということで、先生のお伴をして新町通りを北大路まで下り、それから北大路通りを東に、立命館の近くの喫茶店でコーヒーを御馳走になつた。その道すがらいろいろ話をきかせて頂いたの

であるが、要するに、“秋月先生は、君にとってこわい先生と思っているだろうが、決してこわいばかりの方ではない。いろいろ蔭では心をくだいておられて、君のことなどもずいぶん分ばくにはほめておられる。だから表面どんなことがあっても、意気消沈したり、失望したりせずに頑張って勉強するように”ということであった。そのほかにも、いろいろな話をきかせて頂いたはずであるが、その記憶はない。ただうえに述べたことだけが、嬉しく心に残っている。もちろんわたくしもすでに秋月先生は、こわいばかりの先生ではないこと知っていたし、何かにつけてわたくしによくして下さいだったこともわかっていたが、しかしそういうことをいいにわざわざわたくしの家までおいで下さった小堀先生の御好意はいまでも忘れられない。

また同じころのことであったが、9月1日（か2日かたしかでないが）になると午後おそくに秋月先生がわたくしの研究室に来られて、“岡村の墓参りに行こう”と誘われたものであった。岡村先生は、昭和23年惜しくも、栄養不足が間接の原因となって逝去されたが、その日が命日に当るのである。お墓はたしか黒谷の真如堂にあったかと思うが、神楽岡のあたり吉田山の麓を通ってお墓参りのお供をしたものであった。途々、数学の話や、岡村先生のことなどいろいろきかせて頂いたものである。岡村先生は、大へん優れた数学者でかつ人格的にも立派な方で、秋月先生は常日頃“岡村が生きていたらなあ”とよくいっておられたものであった。そのようにして、2、3回もお墓参りのお伴をしたことがあるように記憶する。

またあのころよく天王町にある秋月先生のお宅にお邪魔したものであった。正月には新年の御挨拶にいいお屠蘇をよばれたり、鯛の塩焼きを御馳走になったり、またときとして麻雀卓を囲むのに誘ってもらったりしたものである。あのころはまだ先生もそれ程忙しくなかったようで、メンバーは先生のほかは多くの場合、永田、中野、松阪、中井らであったかと思う。いつだったか麻雀をして先生宅で泊めていただいたこともあった。そのような期間はどのくらい続いたであろうか。そのうち先生もだんだん忙しくなられて、いつのまにやら沙汰済みになってしまった。

このようにふり返ってみると、あのころは教室外での師弟や友人間の交流がかなりあったように思う。それは1つには先生も、学生も、大学を中心として、そう遠くない範囲内にすんでいて、気軽に行き来が可能であったせいでもあったろう。あのころわたくしの止宿先を訪ねてくれた人は決して少なくなく、秋月研究室で当時一緒に勉強していた友人は大抵一度は来てくれたのではなかったろうか。

秋月先生も何かの折、神楽岡にあったわたくしの止宿先におより頂いたこともあった。いまそういうことを思い返してみると大変懐しくほのぼのとしたものを覚える。いまのわたくしにはそういう交流は大変少ない。必ずしもまわりの人の人情が薄くなったというわけでないと思う。お互いに住んでいるところが遠くて、片道に1時間半や2時間、もしくはそれ以上もかかるとなれば、ぶらりと着流しででかけるわけにもゆかず、それに加えて年をとったせいか、こちらから出かけるのも面倒になって、休みの日はつい家にいてごろごろしているのが気楽とばかり不精をきめこむせいでもある。考えてみると学校教育というのは、教室内における授業だけ

がすべてではないはずで、むしろ教室外のふだん着のつき合いをもっと大切にする必要があるのではなからうか。そのためには、大学の近くに教師も学生も住んでいて、常日頃、袴をぬいだ着流しの交流ができるような形態こそ望ましい姿ではないだろうか。いまの住宅事情、大学のマンモス化ぶりを考えると、とうていそのようなことは行なわれ得ないと思うが、果していまの状態のままでもしなくて放っておいてもよいものであろうか。

C. シュバレーが来日したのもちょうどこのころのことであった。主として名古屋大学に滞在して類体論の講義をしたのであったが、その中一週間程京都に来て、“モデル理論”の講義を行なったのである。“モデル理論”というのは、代数多様体を点集合として捉えずに、局所環の集合としてみなすというもので、これが後に永田君によって発展させられて、“デディキント環上のモデル理論”となり、さらに大きく、グロタンディックのスキーム理論に昇華するわけである。何しろ類体論や局所環論ですでに立派な業績をあげている著名な数学者がみえるというので、緊張して迎えたものである。講義は大変明快で、初めてきく英語の講義であったが、それ程苦労はしなかった。都ホテルに滞在していたのであるが、囲碁がすきだというので、秋月先生のすすめで松阪さんと2人で彼をホテルに尋ねたことがあった。2～3級程度の腕前であったかと思うが、何番かお相手をして楽しく1日を過したものであった。その時、シュバレー先生が煙草をすすめてくれたので、フランス煙草が喫えると思って喜んで頂戴したら何とそれは“新生”という安物煙草だったのでびっくりしたことを覚えている。後できくと、“新生”が一番フランスの煙草の味に近いので、もっぱらそれを愛用しておられたとか。

そのころのこととしては岡先生のセミナーのことも忘れられない。当時岡先生は奈良女子大に籍があったのであるが、週に1度多変数函数論のセミナーに京大に来ておられた。会場は3階の会議室で、多変数函数論をやろうとしていた大西氏らのグループと、代数幾何のグループが一緒になって、話をきいたのであった。テキストは岡先生の有名な多変数函数論に関する一連の論文を1からとりあげたのであった。内容の方はよく覚えていないが、なかなか活発な質疑があったように記憶している。しかし一面岡先生一流の話術に煙にまかれたような思いをすることも、しばしばであった。そのころ先生は仏教のある宗派に凝っていて、つねに片方の手に数珠をかけておられた。一度などはどういいういきさつでそうなったのかは覚えていないが、セミナーの参会者を引きつれてその寺に出かけ、座禅をくまされ、話をきかされたこともあった。愉快的なこともあった。先生は野球がお好きだったのか、あるいはたまたまその時の日本シリーズに興味をお持ちだったのかは定かでないが、セミナーをやめて野球を見にゆこうと提案されたことがあった。その時の日本シリーズは、西鉄・巨人戦で、巨人3連勝の後、西鉄が鉄腕稲尾の神業的活躍によって逆転優勝した年であった。もちろん、われわれの側に異存のあろうはずはなく、近くの喫茶店のTVで観戦したものだった。岡先生の振舞いには、われわれの常識では測れない面が多々あったし、こんなことが良いととだとは思わぬが、このごろのわ

れわれ教師族のあり方は、大体において小じんまりとした健全な常識人の域を脱しないことと照しあわせて、何か考えさせられることがあるように思う。

J. P. セールの有名な論文 *Faisceaux algébriques cohérent* が発表されるかなり前に、その概要を記したのが秋月先生の手許にはいり、それをわれわれの仲間が一生懸命証明をつけようと努力したことがあったが、それはやはり28年か29年ころのことではなかろうかと思う。28年というのはわたくしにとっても忘れられない年である。その年、京大教養部講師として任用され、やっと身分的にも、収入的にも安定してほっとしたものである。それまでも、特別奨学生として、また教養部の非常勤講師として、ある程度の収入はあったが、前者の額は、一時代前と違って相対的に低下していたし、非常勤手当は講義のない時はゼロというのであるから心細い次第であった。松阪氏が東京のお茶の水女子大に講師として赴任したのは、もう少し前のことであったが、井草氏がシカゴ大学に招かれて京都を去ったのは、この時分であったろうか。何しろ四半世紀も前のこととて確かではない。

このようにして古い仲間は徐々に散らばっていったが、また新しい仲間も生まれつつあった。すなわち28年3月には新制大学の第1回卒業生が生まれ、その中に松村英之君や鈴木敏君の名がみえる。翌29年には広中平祐君が秋月研究室の一員として迎えられ、これら新しい人々が、去った人の空隙を埋めてくれたのである。このころがちょうど世代交替の一時期に当るのではないかと思う。

わたくしの下手な随想も交替する時期に来ているように思うのでこの辺で筆をおく。

マセマティックス Vol.1 No.1(1980) より転載

中井 喜和氏は 1949年(昭和24年) 卒

タイトルの所属は 1980年当時のもの